

第6号活動情報誌

AIMIB



これからアク
アムーブメン
トが始まる

特定非営利活動法人
楽しいスポーツを支援する会

子供たちには、何でも吸収する強い魂が宿っている



水中ウォーキングで健康に！！

宇野佳子

*水の恩恵を受けながら楽しく健康づくり！

水には、「浮力」「抵抗」「水圧」「水温」という4つの特性があります。その恩恵を受けながら個人のレベル、体力、年齢などにあった運動をすることができます。

①**浮力**：浮力とは、人を浮かす力のことです。人は浮くことで、重力に対して身体を支持している坑重力筋を弛緩させ、十分にリラックスすることができます。また、水の浮力は下半身や関節への負担を軽くするので腰、膝などに直接体重がかからず、陸上で運動するのが困難な人、肥満者、妊婦、リハビリテーションが必要な人の味方になります。

②**抵抗**：水の中では動くスピードが速くなるほど、抵抗が大きくなります。上下や左右だけでなく、どの方向にでも抵抗が働きます。陸上のようにダンベルの重さをかえ負荷の調整をすることなく、水中ではスピードをかえるだけで、いくらでも負荷を調整することができます。つまり個人の能力にあわせて負荷となる抵抗を自在にコントロールすることができるのです。

③**水圧**：水に入ると水圧が身体に加わります。そのため血管は収縮し血流が促されます。この作用は心肺機能を高め、循環器系全体の活性化に役立ちます。つまり水の中にいるだけで、健康が増進されるのです。

④**水温**：プールにはいると、水温は体温より低いいため血管は収縮します。しかし、身体を動かせば、血管は拡張します。水中で運動すれば、血管の収縮、拡張を繰り返すことになり、体温調節機能が高まります。温度変化に対応できる身体になるので、風邪をひきにくくなります。また、血管は低温で収縮し、高温で拡張します。温かいジャグジーに入ると凝りがほぐれ、リラックスできます。これは血管が拡張することで、全身の血液の循環がよくなるためです。

水は素晴らしい力を持っています。上記の水の4つ特性を知り、目的に応じて個人の体力や能力にあわせて運動を組み合わせれば効果はさらにあがります。



水中ウォーキングで広がる楽しい世界！！

*目標をもって、楽しく、長く続けよう！

最近は、民間のプールでも、フィットネスクラブでも、スイミングスクールでも、水中を歩いている人を多く見かけるようになりました。水中ウォーキングは、スクールに入らなくても、近くのプールに行き、自分ひとりできます。しかし、ただ黙々と1人で歩いていたのでは、やがてあきてしまい、プールに通うことがつまらなくなり長続きしません。

プールは、水の恩恵を受けながら楽しく歩くことができる健康づくりの場所であると同時に、友達をつくる場でもあります。せっかく色々な人と出会えるのです。

①こちらから笑顔で挨拶をして、お話をするきっかけを作りましょう。人は、開かれた心や笑顔に接すると、同じように返してくれるものです。

②同じ曜日、同じ時間にプールに行くようにすると、同じ顔ぶれの方々に会う事が多くなり、親しみがわき、声をかけやすくなります。実際、長年プールの現場で、多くの方々に接していますが、



同じ曜日、同じ時間にプールに通っていたので、親しくなり、友達になるケースは多いようです。そして、仲良くなった友達とおしゃべりをしながらプールを歩き、時には、食事に行くなどして、プールから交流の輪を広げていきましょう。さまざまな人から刺激をうけることは、生活をいっそう豊かで楽しいものにするはずです。

③水中運動や水中ウォーキングに限らず、健康づくりのための運動を長続きさせるコツは、目標を持つことです。6ヵ月後にこのぐらいやせようとか、今日は、何メートル歩こう、といった目標をたてるのです。目標が達成されたら、さらに次の目標を持つこと、これが大切です。人が、楽しい、おもしろい、と感じるのは、達成感を味わった時です。達成感を味わえる小さな目標を次々にクリアしていくのも、楽しくおもしろいものです。

④仲間とおしゃべりをしながら、プールを前歩きで何度も往復するのもよいのですが、

水中
ボク
シン
グ



色々な歩き方を楽しんでみましょう。前歩きだけでなく、後歩きや横歩きもしてみましょう。ジグザグに歩いてみたり、腰を回しながら歩いてみたり、腕の動きを変えてみたりと、

色々な歩き方をすると、全身の筋肉や関節を万遍なく使うことができ、より健康になることでしょう。

⑤もし、スクールに入りたいのなら、一度、無料体験や、一日体験をしてみよう。またパンフレットを見て、通いやすい場所であるのか、スクール側の姿勢（健康づくりに熱心なのか、それとも競泳選手育成に熱心なのか）や、プログラム内容をチェックしてみましょう。スクールを選ぶポイントは、会員さんたちが、楽しんで水と親しんでいるか、和気あいあいとした雰囲気があるかどうか、楽しそうにレッスンが行われているかどうかのポイントです。フロントの接客、ご案内の仕方も、スクール選びのヒントになります。

自分の健康は、自分の手足・頭を使って！！

*色々な歩き方を考え、工夫し、自分の健康は自分で手にいれよう！

2つの基本を頭に入れて、自分自身で考え、工夫しながらプールを歩いてみましょう。

基本1. 同じ動作でも、①ゆっくり大きく水を動かせば、関節可動域の調整になります。関節の可動域をひろげる運動の基本は「気持ちよく身体（筋）を伸ばす」です。ゆるやかに、水の抵抗に身をゆだね筋や腱を伸ばし、身体の柔軟性を高めましょう。呼吸は動きにあわせて、ゆっくりと腹式呼吸を行います。②速く、力強く動かせば、筋力トレーニングになります。大きな負荷をかけたいと思えば、大またで歩いたり、速く歩いたり、弾みをつけたり、ペースを変えたりすれば負荷を増やすことができます。

基本2. 動かす部位を、下から①つま先・かかと②足首③ひざ④股関節周辺⑤腰周り⑥体側⑦肩甲骨周辺⑧肘⑨手首⑩指先⑪首と、各部位を順番に伸ばしたり、縮めたり、振ったり、回したり、また、各部位を使い、水を押ししたり、ひいたり、かき回したり、と動かすと、自然に万遍なく身体全体を使うことになり、よりよく健康になることができます。



基本1・基本2を頭に入れて、自分の身体の声に耳を傾けながら歩くと、自分のプログラム：水中ウォーキングができます。凝りを感じる部分はほぐしながら、弱いと感じる部分は強化しながら、痛いと感じる部分は保護しながら、自分自身にあった色々な歩き方を工夫するのも楽しく、たくさんの発見もあります。

また、中高齢者には、身体のケアが大切になります。身体を動かして鍛えたのと同じくらい、身体を休めてケアをすることが健康でいられるポイントで

す。

人生の旅は片道切符

*人生は片道切符。同じ年齢の、同じ状況に戻ることはありません。亡くなった家族や知人、髪が多くスリムだった若かりし頃の夫に二度と会うこともありません。だからこそ、今が大事、未来が大切。一期一会なのです。

*人間の存在を支えるのは、3つの柱だと言います。「将来の夢」、「自己決定できる自由」、そして「他者の支え」です。病によって夢をくじかれ、自分の意思で生活する自由が奪われたとしても、他者の支えを太くすれば、人間はなお穏やかでいられると言います。

*プールで出会った仲間、水の素晴らしさを知る仲間と共に、この1分1秒を大切に、いつまでも健康で、水中ウォーキングや水中運動を続けていきたい。これが私の夢です。

宇野佳子

東京女子大学哲学科卒業、ドルフィンキックの創始者長沢二郎氏のもとで水泳指導を学ぶ。高齢者向きのアクアエクササイズに興味をもち度々渡米しアクアを学ぶ。3人の子育てを経験に様々なアクアプログラムの実践指導に勤めている。月に約100本の指導や講習を行いながら、楽しく「アクア修行」を続けている。



NPO 法人楽しいスポーツを支援す

る会認定講師

日本における WATSU プロ指導者第1号、財団法人体力づくり指導協会評議員・高齢者体力づくり支援士認定講師

日本スイミングクラブ協会認定講師、NESTA JAPA プログラム開発アドバイザー、日本赤十字社水上安全員、日本体育協会上級教師・競泳コーチ、AEA・WABA・HIT・ATR 認定指導員、一億人元気運動協会・チェアエクササイズ認定指導員

写真で見る指導法（知的障害児編 1）



I. プールサイドでムーブメント

プールサイドでのムーブメントは、プールに入る準備段階として、子ども達の発達レベル及び特徴などを知る上で、とても大切です。子ども達の中には自分自身の身体のパーツ（頭・肩・腕・胸・お腹・足等）を理解していない子もいます。まず、皆で手を叩きながら、指導者が“膝”といいながら手で膝を触ります。この時、模倣が出来るかどうか指導者は

確認します。つぎに、言葉の指示と違った身体の部位を指導者は示します。言葉の指示どおり表現できる子は、集中力もあり複雑なプールプログラムも可能です。

また、全ての関節を十分に伸ばして、身体で大きく表現します。次に、全ての関節を曲げて身体を小さく表現します。このムーブメントは、子ども達が大小の弁別を理解できるようになります。もう一つ大切なチェックとして、静的バランスがあります。このムーブメントは、開眼及び閉眼の片足立ち（左右）です。



II. プールの環境

プールに入る時は、子ども達がバラバラにならないように、一定の方向性を決めて、プールに入ります。例えば、ラダーやスロープを利用して、入水する箇所を決めてプールに入ります。入水したら、プールサイドを掴まりながら横に移動（カニ歩き）します。マンツーマンで子どもに付く場合は、子どもの脇から指導員の手を入れ子どもの動きに合わせて、移動します。落ち着いて移動してる子どもには、

一人で移動してもらいます。指導員

のパフォーマンスを子どもに強要することは、子どものパフォーマンスを殺すことになるので、注意したいですね。



III. 繋ぎ遊び・円陣遊び

子ども達がカニ歩きでプールの大きさを理解した段階からそれぞれの肩に手を当て繋ぎ遊びに移ります。繋ぎ遊びでは、指導員、子ども、指導員と交互になるように繋がります。指導員の人数が足りない場合は、コミュニケーションが取れる子を指導員の代わりにすることにより、スムーズに繋ぎ遊びが可能となります。

また、自分の世界に入って繋ぎ遊びに参加できない子には、



指導員の腕の中にその子を入れ、指導員が前の人の肩に手を当てて、繋がります。最初は、静かにゆっくりと移動し、慣れた段階からジャンプしたり、身体を横に揺らしたりして、変化をつけてS字を描くように移動します。次に、S字の動きを狭め円陣遊びへと移行します。手を繋ぎながら右回りか左回りかを決めて円陣を作ります。ある程度回った時点で回る方向を変えます。次に、手を繋いだまま、円の中央に向かって円を小さくします。中央に集まった時に、“こんにちは”と声を掛けます。次に”さようなら”と声を掛けながら大きく広がり右回り、左回りと展開します。円陣遊びも参加しない子については、円陣の中に入れるか、指導員の腕に乗せるようにして、参加させます。また、自分の世界に入り込んでいる子を無理やり参加させるより、皆が楽しく笑顔で楽しんでいる姿を見せることにより、時間の経過とともに参加してきます。

また、子ども達の空間意識を高めるため、浮き棒のトンネルを作り、くぐらせます。くぐる瞬間、自然に頭を下げるようになり、ヘッドコントロールにつながります。プールフ



指導員の腕の中にその子を入れ、指導員が前の人の肩に手を当てて、繋がります。最初は、静かにゆっくりと移動し、慣れた段階からジャンプしたり、身体を横に揺らしたりして、変化をつけてS字を描くように移動します。次に、S字の動きを狭め円陣遊びへと移行します。手を繋ぎながら右回りか左回りかを決めて円陣を作ります。ある程度回った時点で回る方向を変えます。次に、手を繋いだまま、円の中央に向かって円を小さくします。中央に集まった時に、“こんにちは”と声を掛けま



ローアーの上を歩くことは、股関節、膝関節、足首を意識することは、スムーズな協応動作につながります。



荒井正人

NPO 法人楽しいスポーツを支援する会 認師 NPO

法人 JAEA 副理事長

水中ムーブメント協会 会長

日本ムーブメント教育協会 認定専門指導員

日本特殊教育学会 発表論文 水による自閉症児の実験経過

水による自閉症児のプログラムの在り方 水による脳性麻痺児の治療実践経過 等多数

主な著書

障害児のムーブメント教育・原理と指導の実際(フレール館)

実践障害児教育「特集；どんな子供でも泳げるようになる」(学研)

水泳ムーブメント(コレール社) 等多数

講演及び講師

日本言語学会「自閉症児の水泳指導と言語発達」

国立特殊総合研究所「水泳と言語発達」「長期研修生の水泳指導」「病弱児の水泳指導」

「国際水泳医学会・コーチング会議・自閉症児の水泳指導」

かながわゆめ国体「国際スポーツ会議」

神奈川県立各養護学校「障害児の水泳指導の実際」 等多数



老いることを楽しむために —人生の中のワークシェアリング—

玉置佑介

●1. はじめに

2008年4月から「後期高齢者医療制度」が始まったことは皆さんの記憶にも新しいと思います。この制度は、75歳以上の高齢者を「後期高齢者」と呼称し、一定の対象層として独立させて、新しい保険システムのもとに組み入れるものです（ちなみに65歳～75歳未満の高齢者は「前期高齢者」に分類されています）。

この「後期高齢者医療制度」の発足により、「後期高齢者」は、国民健康保険やサラリーマンの健康保険などの医療制度に入りながらも、老人保健制度からもダブルで医療を受けられるという、いわば共同運営的なこれまでの保険システムから脱退して、新たに「後期高齢者医療制度」に加入することになりました。この結果、平成20年度の「後期高齢者」のおおよその数は約1,300万人、「前期高齢者」の数は約1,400万人とも言われ、合わせれば2,700万人にのぼると言われています。

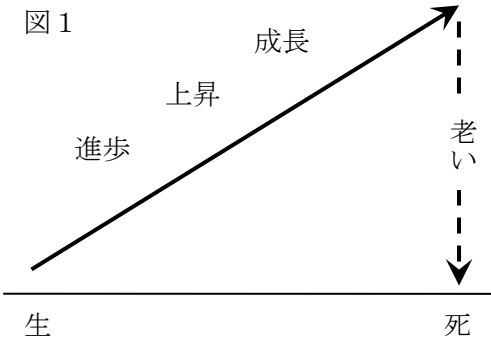
現在、この「後期高齢者医療制度」にはさまざまな問題点が指摘されていますが、今回はあえてふれません。それよりもここでは「老い」というものを今後どのように考えていけばよいか、また、こうした社会情勢のなかで「老い」を肯定的に受け入れる考え方、老いることを楽しむための考え方をご紹介します。



●2. 「老い」に対するイメージ

冒頭でご紹介しました「後期高齢者医療制度」は「社会保障」と呼ばれる領域のお話です。日本のこれまでの「社会保障」は働くことで賃金を得ることが難しくなった方々の生活を保障するものが大部分だと言われています。わかりやすく言ってしまうと「高齢者」に焦点をあてた「人生後半の生活に関する保障」が日本の「社会保障」です。このように「社会保障」の主な対象者である「高齢者」はどのようにイメージされているのでしょうか。まずはこのことを確

認していきたいと思います。



古来より日本では人間の一生を「春夏秋冬」の四季になぞらえて「青春・朱夏・白秋・玄冬」と表現してきました。人生 50 年と詠われた近世以前とはことなり、人生 80 年と言われる現代では「青春」は 16 歳から 20 歳代、「朱夏」は 30 歳代～40 歳代、「白秋」は 50 歳代～65 歳頃、「玄冬」は 60 歳台後半以後ととらえられるのでしょうか。この観点から

すれば、先にふれた「前期高齢者」は「白秋」、「後期高齢者」は「玄冬」にあたります。ここで図1をご覧ください。私たちがふだんイメージしている人生は、この図のように直線的なものではないでしょうか。そして、「白秋」にさしかかると一気に急降下して「玄冬」を迎えて死にいたる。この「白秋」から「玄冬」の過程が「若い」という現象であり、進歩・上昇・成長とは無縁の何ともさみしいイメージがつきまとっています。悪く言えば、家族に「依存」し、「介護」される社会にとってみれば「お荷物」とされ「保障」の対象とされるのが「高齢者」でしょう。

では、どうして「若い」や「高齢であること」は秋や冬といった季節感で語られ、春や夏といった季節や進歩・上昇・成長といった視点で語られてこなかったのでしょうか。「前期高齢者」と「後期高齢者」の対象となる方々が 2,700 万人にもものぼる現代日本において、「若い」という現象に積極的な意味を見出すことが非常に重要だと思われまます。それと同時に先にふれた「若い」に対するイメージを新たなものにしていくことが求められているのだと思われまます。次からは「若い」という現象に新しい意味を吹き込もうとしているいくつかの考え方をご紹介したいと思います。

●3. 「サクセスフル・エイジング」と「プロダクティブ・エイジング」

そもそも、人間にとって「若い」という生理現象は肉体的・精神的なものの「衰え」であり、「働くこと」を含めたあたりまえにできていた日常行動が「できなくなること」を意味します。だからこそ、「働くこと」からリタイアさせ「保障」してきたわけです。

しかし、1991 年に国連で「高齢者のための国連原則」が決議され、自立した高齢者像が強調されるようになりました。これをきっかけに老年期をポジティブに生きるためにはどうしたらよいか、という問題が浮上するようになります。この問題への具体的な対処法は 2 つあります。1 つは高齢者の健康や生きがいなどの肉体的・精神的な側面に力点をおく「サクセスフル・エイジング」というものであり、もう 1 つが高齢者の社会的な自立、高齢者が働くことに力

点をおく「プロダクティブ・エイジング」というものです。



「エイジング」は英語で「年齢・老化・加齢」を意味する「age」の現在進行形ですから、「サクセスフル・エイジング」とは「健康で成功した加齢」を意味します。つまり、退職後に精神的にも肉体的にも健康な生活を送ることに主眼があります。他方、「プロダクティブ・エイジング」とは、あくまでも生産的な活動（プロダクティブ）に参加して生きることには主眼がおかれています。

つまり、働いて食いつちを自分で稼ぐことが「高齢者」の「自立」の要であるという考え方です。この2つの考え方では従来までの「老い」のイメージが塗り替えられていることがわかります。老年期にも進歩・上昇・成長のきっかけはあるはずで、そもそも、「生きること」そのものが「老い」のプロセスなものですから「白秋」や「玄冬」にも積極的な意味があってもよいはずで、このように「サクセスフル・エイジング」や「プロダクティブ・エイジング」の考え方は、「高齢者」に対する否定的なイメージを変えるためには非常に有効なものだと考えられます。

けれども、この2つの考え方は「年寄りにも能力がある、価値がある」ということをつねに証明していかなければならないものでもあります。となれば、「高齢者」になってまでどうして自分を奮い立たせて「老い」に立ち向かわなければいけないのか、と考えるのが普通でしょう。また、そんなパワフルな「高齢者」像を受け入れることのできる人も限られているはずで、同時に「自立」という考え方にも問題があると思います。何でも自分で決めることが「自立」なのでしょうか。自分のしたいことは自分で決める。これは「自立」ですよ。自分がしたいことに他人のサポートが必要であり、他人を介して自分のしたいことをする。これも「自分で決めること」、すなわち「自立」だと言えるのではないのでしょうか。他人の力を借りて自己実現することも「自立」と言えないのでしょうか。

ここではパワフルな「高齢者」にしかできない「年寄りにも能力がある、価値がある」という主張をする代わりに能力が無くても誰からも貶められずに生きていける社会をつくるのが大切だと考えたいと思います。問題は「高齢者」個人にあるのではなく、「高齢者」をとりかこむ社会にこそあるはずで、

●4. 人生の中のワークシェアリング

自らの「老い」を受け入れて、付き合い、生きていく選択肢も十分ありえる

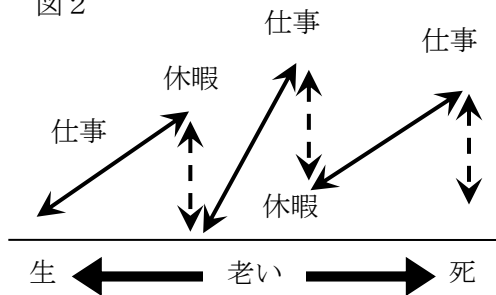
はずなのに、どうして私たちは「古い」を否定的にとらえ、それを乗り越えようとしてしまうのでしょうか。そのひとつの答えとして次のようなものがあります。

現在の日本では、「子ども—現役時代—老人（退職者）」という人生行路（ライフコース）が根強いようです。これは「青春・朱夏・白秋・玄冬」という考え方にも見て取れます。また、「サクセスフル・エイジング」や「プロダクティブ・エイジング」にも同じことが言えるでしょう。なぜなら、「子ども—現役時代・老人（退職者）」というライフコースが普遍的なものであるからこそ2つの考え方に積極的な意味が生まれるからです。簡単に言い換えれば、「仕事は現役時代に集中し、子どもと老人の時期は基本的に仕事から離れている」という前提が日本社会には存在していると思います。

しかし、先にもふれたように人生が80年にもおよぶようになった現代高齢社会では「子ども—現役時代—老人（退職者）」といった直線的で固定的なライフコースはそぐわないような気がします。ましてや「前期／後期高齢者」と位置づけられる方々は全人口の約4分の1にもなるのですから今後は現役世代の間であっても仕事を離れる時期や老後の「新しい人生」を送るための準備期間をつくっても良いのではないかと思います。つまり、人生の中で「仕事」と「休暇」の時期をさまざまに割り振ることが可能であってもよいのではないのでしょうか。そして、それを社会が用意するというのはどうでしょう。



図2



以上の考え方を図1と関連させて作図してみれば、図2のようになるのでしょうか。「生きること」全体を「古い」ととらえ、仕事や「休暇」がひとつの時期に偏ってはいません。また、矢印の向きが直線的ではなく双方向的です。それに上昇（仕事）と下降（休暇）が幾度となくおとずれるのも特徴です。つまり、これからの「高齢者」に望ましいのは、

現役時代と同様にフルタイムもしくはパートタイムの賃労働で働くことではなく、だからといって完全にリタイアするというでもない両者の中間を「行ったり来たりする」というライフコースが考えられないのでしょうか。そのことによって「サクセスフル・エイジング」や「プロダクティブ・エイジング」の

積極的な意味も有効なものになってくると思います。

以上の図2で示したような「仕事」と「休暇」の時期を人生の中にさまざまに割り振る考え方は「人生の中のワークシェアリング」と言われています。「ワークシェアリング」にはいろいろな考え方がありますがここでは大きく2つの考え方をご紹介します。1つは不況などで企業の業績が悪化した時に一人当たりの労働時間を減らすことで企業全体の雇用を維持するものです。他方、2つ目としてはさまざまな時間ごとの短時間労働を組み合わせることで雇用機会を増やすものがあります。つまり、苦しい時に「仕事」(work)を分け合う(sharing)ことが「ワークシェアリング」です。

この観点からすれば「人生の中のワークシェアリング」とは、通常の「ワークシェアリング」の考え方を人生全体に応用したものとと言えます。通常の「ワークシェアリング」は仕事が少なく苦しい時に仕事を分け合って「職業」を失わないようにすることでした。それに対して「人生の中のワークシェアリング」とは「高齢者」に限らずにさまざまな人が有意義な「時間」を失わないようにするものだと考えられます。

●5. おわりに

このように今回は「老い」に対する否定的なイメージを考え直す視点をいくつかご紹介してきました。「前期／後期高齢者」や「青春・朱夏・白秋・玄冬」という人生の割り振り方に対しては働く時期とリタイアしている時期が人生のなかで「行ったり来たりする」ことがあっても良いと思います。また、「生きること」そのものが「老い」のプロセスなのでですからどの時期であっても「青春」や「朱夏」が訪れても良いはずです。

あとは「社会保障」が「人生後半の生活に関する保障」一辺倒ではなく、「人生中盤」や「人生前半」の生活もしっかりとサポートするものでなければ「人生の中のワークシェアリング」は実現できません。人生50年から80年と高齢期の時間が大きくなったことで「前期／後期高齢者」の区分が存在するのであれば、子どもたちの多くが大学進学するようになった現代は子どもである時期も長くなっていると言えるでしょう。それならば「前期／後期子ども期」という区分も可能だと思います。昔に比べて「子ども期」は拡大しつつあるのであれば、「人生前半の生活に関する保障」も重要な意味をもつようになるはず。何も「高齢者」だけが「保障」の対象となる必要性はないはず。です。

「高齢者」に限らず誰もががつつがなく生活できる社会のために「老い」や「高齢であること」を積極的に受け入れて否定的なイメージをより豊かなものにしていくこと、このことが老いることを楽しむために必要だと思います。そして、「老い」や「高齢であること」の問題が「高齢者」だけの問題ではなく、あらゆる人の問題であるという認識をもつことも重要なことになると思います。そのことによって「人生の中のワークシェアリング」の実現も近づくと思います。

誰もが明るく・楽しく・元気良く人生を謳歌できるように。

(付記) 今回のお話は以下の文献を参考にしました。

広井良典 (2006) 『持続可能な福祉社会—「もうひとつの日本」の構想』ちくま新書

→「人生の中でのワークシェアリング」の考え方や「前期子ども／後期子ども」の提案、図 1 はこの広井さんのものです。現代日本社会のさまざまな問題に対するオルタナティブを非常にわかりやすく提案している良書です。

高橋ますみ (2003) 『老いを楽しむ向老学』学陽書房

→日常のさまざまな「老い」をめぐる問題にプラス志向で向き合っていく新しい「老い」の提案をしています。著者の高橋さんは NPO 法人をたちあげ「日本向老学学会」を組織しています。老いに向かう向老学の問題意識を「いかに生きるか」とし、生活者の視点で探究しています。



玉置佑介(たまおき ゆうすけ)

<在籍>

上智大学大学院総合人間科学研究科社会学専攻博士後期課程

武蔵大学非常勤講師

日本福祉大学特別講師

主要業績

2006 年『上智大学社会学論集』30 号(上智大学社会学科編)

「「当事者」概念の再検討—推論・解釈過程・コミュニティー—

『障害学研究』No. 2(障害学会編／明石書店)

「障害当事者に対する水泳指導の社会過程—「ケア」の学びとしての指導—

2007 年『上智大学社会学論集』31 号(上智大学社会学科編)近刊予定

「相互行為としてのインタビュー再考—「内容」と「方法」のバランスをめぐる—



